

5 「序文 (三)」<sup>1)</sup>



図1 フラ・マウロ世界図（1459年、ヴェネツィア・サンマルコ図書館）

「マルコ・ポーロ殿の書のいくつかの地に関わる説明、付ラバルバロの話」

マルコ・ポーロ殿は第一巻第一章を小アルメニアの旅から書き始めているが<sup>2)</sup>、その理由というのは、彼が後に教皇グレゴリオ十世となる特使テオバルド・デ・ヴィスコンティのいたアークレを発ち、海路小アルメニアなるギアッツィア [ライアス] 港へと向かった折、そこが父・叔父ともどもグラン・カーネ [大カーン] のもとに赴くにあたって上陸した最初の地だったからである。当時、大小二つのアルメニアは一キリスト教君主の支配下であり、その領土はソリア [シリア] の海の彼方にまで及んでいたが、タルタル人のもとに貢納していた<sup>3)</sup>。もともと彼は、そうした事情によく通じぬ者から伝え聞いたところにしたがって書いており、その点読者はこの著者から、ストラボンやプトレマイオスその他の人たちにみられるあの詳しきや書き方を期待してはならない。当時ははなはだ粗雑で、上品な文章や洗練された文体、今日用いられているごときコスモグラフィーの記し方は人々の間にまだ広まっていなかったからである。加うるにかの時代には、ポネンテ [西方] におけるゴート人のごとく、レヴァンテ [東方] 全体を支配下に置いていたタルタル人の打ち続く戦乱により諸地の古い呼び名がすっかり混乱し、ために名前が変わり、一つの地が別の地と混同され、彼がどんなに注意深く用いようとしたところで、あれ以上優れた知識を我々にもたらしことはできなかったろうからである。こうした名前の変更が、イスマエル君主の説によれば<sup>4)</sup>、かのアルメニアのキリスト教王の領有していた土地が当時ロメイ人すなわちギリシア人の国と呼ばれた原因なのであった<sup>5)</sup>。また、その国境は今のギアッツィア湾であるイッシコ [イッソス] 湾の上方にまで達しており、そうしたことを知ってマルコ・ポーロ殿は、第二章で書いているごとく、[小アルメニアの] 南方には聖地が、北方には今日カラマーニと呼ばれるトルコマン人たちが、東北東にはカイッサリア [カイセリー] とセヴェスタ [シヴァス] が、西方には地中海が位置することを理解したのであった。また第三章にみられるごとく、上記二つの市はコーニョ [コンヤ] とともにトルコマニアにあったが、プトレマイオスではキリキアに置かれており、マルコ・ポーロ殿はそれらをカイッサリアとセヴァステ、つ

まりカエサレアとアウグスタ、そしてリカオニアにあるコーニョをイコニウムと呼んでいる。

トルコマン人、これはタルタル人によって付けられた新しい名前だが、彼らについてはイスマエルがその地理書の中で語っており、それを読んで、ここに紹介するのがふさわしいと思えたのである。シリア沿岸についての条りで、彼は当時スイディアと呼ばれたセレウチア [シリフケ] 市から始め、次のように言っている。まず道を西に取って、ムスリムつまりトルコ人の地との国境を越え（というのもイスマエルの時代には小アジア全体がキリスト教徒のものだったからだが）<sup>6)</sup>、僅かばかり北に進むとスカンデローナ [イスケンデルム] の門すなわちアレクサンドレッタのアマーノ [ホムス] の門に至る（そこにムスリムとアラマン [小アルメニア] 人の境つまりキリキアの境界がある）、次いでギアツァの門に至るが、そこにアラマン地方つまりキリキアの港がある。その沿岸を西北に折れ、経度五八緯度三七・五にあるタルソ [タルスス] 市にまで至り<sup>7)</sup>、さらに西に向かうとアラマンの国境を越え、イスマエルの通訳がコリキウム・アントルムと呼ぶコルク [コルゴス] にまで至る。そこを過ぎると、カラマン・トルコマンの子孫であるトルコマニアの人々の地方がある。その地方にはまた、上述通訳がタウロ [タウルス] 山と呼ぶところのカラマン [トロス・ダジュラ] 山があり、イスマエルによれば当時そこには多数のトルコマン人が住んでいて、君主はアウッド・カラマンといい、その山はタルソ市の境界からラスカリの領土まで、つまりコンスタンティノーブル帝国にまで及んでいた。ラスカリとは前に述べた、兄皇帝イサキオスの目をえぐってコンスタンティノーブルの僭主となったアレクシオスの娘の一人アンナを妻に迎えた、かのテオドルス・ラスカリスのことである<sup>8)</sup>。これが故に彼は、当時ヴェネツィア人とフランス人がコンスタンティノーブル市とロマーニア [ビザンチン] 帝国の大部分を支配していたにも拘らず、コンスタンティノーブル対岸の大海 [黒海] とプロポンティデ [マルモラ海] に至るまでのあの、今日ナトリア [アナトリア] あるいはトゥルキアと呼ばれるアジアの地域において、沿岸ならびに内陸の多くの市で暴君として君臨することができたのであった。以上からして（マルコ殿の言うごとく）、これらトルコマン人たちはタウロ山やアマーノ山のような山岳や近寄り難い地域に住んでいたことが分かる<sup>9)</sup>。

第一巻第四章のダルジジ [アルチェチュ] は現在バルギス、パイプルト [パイプルト] はカルプルトと呼ばれる。

同章に出てくる、洪水後ノアの箱船が停泊した非常な高山 [アララト山、5156 m] についてだが、幾人かの著者によれば、ストラボンがタウロ山の一部であろうとしたゴルディエイ山系のある山であろうとのことである。

第五章のゾルザニア [ジョルジャ、グルジア] 地方とは、ストラボン、プリニウス、プトレマイオスではイベリアと呼ばれている所で、その地で我らが主イエス・クリストの信仰を説いた勇敢にして誉れ高き殉教者、聖ゾルジ [ジョルジョ] にちなんでその名で呼ばれるものである。かような次第で彼は、今なおその国民のもとではあまねくこの上なく崇められているのである。<sup>10)</sup>

同章に述べられているアッバク海、つまりイルカーノあるいはカスピ海についてだが、これは余り知られていずまたマルコ殿自身も少ししか触れていないことが分かるが<sup>11)</sup>、古今の様々な著者の中に見出したことを手短かに述べておこう。すなわち、皆その上方から北方に未知の地を置き、そこにイスマエルのいうトルキスタン、マルコ殿のいう大トゥルキアがあるという。南方にはその門で名高い二つの市、一つはデルベンドすなわち鉄門あるいはカスピ門、もう一つはその海にちなんで呼ばれるアッバク [バクー] がある。この海は、今日では湖のようだと分かっているが、アウグストゥス帝の時代には上方が閉じているとは知られていず、ポンペイウスが対ミトリダテス戦の折 [B.C.73-63] にその大部分を踏査したとストラボンが伝えているように、北方からそこへと入り込むオーケアノス海 [大洋] の一支流と考えられていた。これについてイスマエルは次のように書いている。「この海は塩分を含んでいるが、オーケアノスがそこに流れ込むのではなくすっかり切り離されており、ほぼ円形である。長さ八百マイル幅六百マイルにわたって広がっている。円形といっても卵形で、人によっては三角形とも言う。クンツァル、ジョルジャン、テルベスタンと三つの名前と呼ばれる<sup>12)</sup>。西側は経度六六緯度四一である。鉄門近く南へ一五三マイル行くと、プトレマイオスではチロと呼ばれるエルクル川の河口がある。南東に道を取ると、アルディウル [アルダヴィル] 地方のモガン市がある。しかし一番南方には二三百マイルすぎたと

ころにテルベスタン地方があり、その沿岸にエルジル地方とディルン地方がある。次いで東に折れるとアブセロン市に至り、同市は経度七九・四五緯度三七・二〇にあり、東へ経度八〇緯度四〇にまで及ぶ。緯度五〇経度七九にまで至ると北に曲がり、そこにはトルキスタン地方とセハクアット山がある。その辺りで同地方最大の河エラタック〔ヴォルガ〕が多くの河口をなしつつカスピ海に注ぎ、広大な葦原と沼沢地を作る。そこを航行する近隣の住民によれば、この河の水が流れ込むので塩分を含んだ透明な水に様々な色がつき、何日航行してもいつも淡水が見つかるとのことである」。これはプリニウスも同様に述べており、そこに流れ込む河がきわめて数多いためかの海のいくつかの部分は淡水であると、対ミトリダテス戦の時にポンペイウスが彼に証言したそうである。このエルター川とは、プトレマイオスがラー、ブルガル人がヘルディルあるいはヴォルガと呼ぶ川のことである。

第五章でマルコ・ポーロ殿が語っているところの、サン・レオナルド修道院のあるゲルカラット〔ヴァン〕湖で四旬節の四十日間に限って獲れるという魚の奇跡についてだが、前述アビルファダ・イスマエルも同湖に言及しており、アルジス湖と呼んでアルメニア・アッシリア・メディア三地方の境界に置いている。そのほとりにには次の町がある。まずカラット〔アーラット〕、マルコ殿の呼び方からしてこれからその名がつけられたものであろう、ついでアルジス〔ヴァン〕、ヴァン、ヴァスタン〔ゲヴァス〕である。そこでは春の四十日間タリキオ tarichio〔塩魚〕という名の種類の魚ばかりが釣れ、風にさらして日干しにしたのち近隣のあらゆる地方に大量に売りさばかれ、それ以降は一年中見られないという。これらについては、数カ月前に拝見させて貰ったのだが、ピエール・ギリョ・ダルビー殿という名の博識のフランス人の、まだ印刷はされていないがいくつかの解説書に書かれてあるのがみられる。その御方は一五四七年オスマントルコのスレイマン大帝がシャー・テクメス・イル・ソフィと戦った際その陣地であり<sup>13)</sup>、かの湖を目にしたのだが、彼によればその湖はストラボンのいわゆるマルティアーナ・パルスにちがいないとのことである。その中でピエール殿も、上述の魚は春の四十日間しか姿を現さないが大量に獲れ、とても美味しくて皆から大いに求

められるから干物にされて車に積まれ、近隣の町に運ばれるが、その四十日が過ぎるともう見られなくなると書いている。マルコ・ポーロ殿の時代にその湖の上方に本当に修道士たちの僧院があったかどうかだが、当時そこの住民はすべてアルメニア人すなわちキリスト教徒だったわけだから、極めて有り得ることで信じてもよい。このアルジス湖は、イスマエルによれば経度六七・五緯度三八・三〇、別の人たちによれば経度六六・二緯度四〇と八あるいは経度六八・五緯度四〇・三五である。

第一巻第十九章で<sup>14)</sup>、コビナム [クー・バナシ] 市ではとても良質の鋼製のまことに美しく大きな鏡が製造され、そこにはアンダニコ *andanico* が極めて豊富にある、とマルコ殿が述べているそのアンダニコについてだが、いろんな時期に商品を携えてここヴェネツィアにやって来る多くのペルシア人に当市のトルコ語通訳であるところのミケーレ・マンブレ殿を通じて何度も問いただしたところ、皆が口を揃えて言うには、アンダニコとは一種の鉄あるいは鋼で、とびきり上等かつ高価でその地方ではどこでも常に貴重品扱いされるから、かつてもし誰かアンダニコの鏡か刀を手に入れることができようものなら、単に刀や鏡と言うよりもとても高価な宝石のように大事にしたものだ、とのことだった。

マルコ・ポーロ殿の第一巻第三十八章にラバルバロについて<sup>15)</sup>、スックィール [スチュー 肅州] 地方に産し、そこからこの我々の所や全世界に運ばれるとあるが、これは、今日あらゆる人が病気の治療にごく普通に大いに用いていることからして、他の何にもまして知るに値することと思われる。また、今までどの本を見ても、非常な知識と見識の持ち主であるさるペルシア人から聞き知った以上のことは書かれていないからである。そこで、カスピ海のほとりモラン [キラン] 地方はタバス市生まれのカジ・メメット [ハジ・マホメット] なる御方から<sup>16)</sup>、過ぐる年幸運にも聞き及んだ僅かなことだが、特にここに書き記しておく必要がどうしてもあろうかと思われる。その御方は自らスックィールにまで行ったことがあり、その後ラバルバロを沢山携えてその頃ヴェネツィアにやってきていたのだった。その日私たちはヴェネツィア郊外のムラーノに食事に行こうと話し合い (共和国の任務からすっかり解放されていて市の外に出たかったのと、その解放感を満喫してみたかったのとで)、たまたま同伴者に優れた建築家であるヴェロ

一ナのみケーレ・サン・ミケーレ殿とトマーズ・ジュンティ殿の二人の親友を得て連れ立った。食事が終わって食卓の布が片付けられると、氏は次のように話し始め、アラビア語・ペルシア語・トルコ語に堪能な優れた紳士で、その能力ゆえに現在この輝かしき当ヴェネツィア市のトルコ語通訳をなさっているミケーレ・マンブレ殿がそれを訳した<sup>17)</sup>。まず彼は、グラン・カーネの領土の最初にあるタングート地方〔唐古・甘肅行省〕の市スッキールとカンピオン〔カンプチュー・甘州〕に至った。グラン・カーネはダイミール・カンと称し、上述市政府に自らの役人を送り込んでいた（両市についてはマルコ殿は第一卷第三八、三九章で述べている）<sup>18)</sup>。両市はムスリム人の国から来ると偶像教徒〔仏教徒〕の最初の市である。そこまでは、ペルシアやカスピ海の近隣の国からカタイオの諸地方に商品を運ぶ隊商に随いて行った。ところが、そこスッキールとカンピオンから先に行くことは、その隊商には許されなかった。同様にその商人も誰であれ、使節としてグラン・カーネのもとに行くのであれば許されない。

このスッキール市は大にして人口稠密、イタリア風に煉瓦造りのとても美しい家があり、天然の石で造った彼らの偶像を奉った大寺が沢山ある。無数の小川の走る平野に位置し、各種の食糧に豊かで、黒い桑の実の樹から絹を大量に作る<sup>19)</sup>。葡萄酒は産しないが、蜂蜜からセルヴェサ〔ビール〕のような彼らの飲物を造る。果物は、寒冷地のため梨・林檎・アンズ・桃・メロン・ココナツ以外は産しない。また語るに、ラバルバロは同地方全域に産するが、沢山の泉や様々な種類の高木の森がある近くの高く岩の多い山岳地帯のは他所よりずっと良質である。土は赤色で、多雨といたる所を流れる泉のためほとんどいつもぬかるんでいる。根と葉については、上述商人がたまたま国からよく観察し極めて精密に描かれた小さな絵を携えてきており、それを懐から取り出して我々に見せ、これが自然の本物のラバルバロの姿だと詳しく説明してくれた。それを私がスケッチしたものを下に附し、その話と解説を彼の語ったところから従って次に記す。

それによれば、葉は普通二スパン〔18インチ約46cm〕の長さがあり、草自体の大きさにもよるが、下が狭く上が広い。周りには一種の細かい毛、我々が産毛と呼ぶようなものが生えている。茎は地上に出ており、そこに葉が付いているが、

## IL RHEVBARBARO



図2 ラバルバロ (原図)



図3 大黃

緑色で地上から指四本分とさらに一スパンの高さがある。図に見られるとおり葉も同じく最初は緑色だが、時と共に黄色くなり、土の上に垂れる。その茎の真ん中に一種の細い枝が伸び、周りにいくつか花を付け、その花は形は野生のスミレに似ているが色は乳青色で、野生スミレより幾らか大きい。臭いはとてもきつくむかつくようなもので、嗅ぐ者に不快感を催させるほどである。地中の根も一か二スパン、あるいは三スパンまでで、色は栗の殻のようで、大きさによって太いのも細いものもある。さては人間の太腿ほどのもの、脚の半分ほどのものもある。その根の周りに細い根が沢山分かれ出て、地中に広がっている。まずそれを取り除け、ついで太い根を切り分ける。中は黄色でとてもきれいな赤い葉脈が沢山走り、黄赤い汁が一杯詰まっており、粘り気があるので触るとすぐ指にくっつき、手が黄色くなる。根を切り刻んですぐ吊るして乾かすと、黄色いねばっこい汁が全部垂れ落ちて軽くなってしまい、そうなるとその美味や美質はすっかりなくなってしまうと考えられる。だからその切り刻んだものを長いテーブルの上に置いて日に三、四度裏返してやると汁は中に溜まり、根の中に固まって残る。そして四日か



ら六日してそれに穴を開け、紐に吊るして風に晒すが、日に当ててはいけない。こうして二か月で干したラバルバロが出来上がり、非常に美味美質である。彼の語るところによればまた、ラバルバロは冬に引き抜くと良い、その頃は（葉が生えはじめる前で）汁と効能が一つになってその根に集まっているからだそうである。その時期と言うのは春先で、カンピオンやスックィール地方では五月末に当たる。さらにまた語るに、夏に引き抜くとその頃には葉が出てしまっており、根は冬に引き抜かれたもののように熟していず、黄色い汁もなく、その上茸みたいにスカスカで軽くひからびていて、あの赤色ではなく、また冬に引き抜かれたものあの美味しさが無いそうである。

また語るに、この根を上述の山に取りに行った者は、土から抜き取って青々とした葉を付けたままのを平地に持ち帰って荷車に載せ、葉の付いたまま満載した一台分を銀一六サジジョで売る。というのも、その地方には鑄造貨幣はなく、銀や金を細い延べ棒にしてそれを一サジジョ〔約4.7g〕の重さに小さく刻むからであり、これは我々のところもほぼ同じである。銀だと約二〇ヴェネツィア・ソルドの値打ちがあり、金だと一スクード半に値する。こうして買われた生のラバルバロは、その買い手によって上述のごとく処理され乾燥させられる。また次のようなびっくりするようなことも語った。すなわち、もしそれを買い付けたいのなら、商人は絶えずそこに通うのでなければ手に入れることはできない、いい評判をもらえないからである。キーナ〔中国〕やインディアから来る者は他の誰よりも沢山買い取り、荷車か駄馬に載せてスックィールに運んでくるが、すぐさま切るか処理しないと四日か六日で痛み腐り始める。また次のようなことも話してくれた。彼が当市に自ら持ち来たったのは生で六頭分買ったのだが、乾燥して処理するとわずか一頭分ほどになってしまったこと。また、青いと苦くて食べられないこと、カタイオの地では我々のもとでのように薬としては用いず、他のとても匂いの良い材料と併せて練り、偶像のための香を作ること。またある所では大量に採れるから、乾かしたのを薪の代わりにひんぱんに燃やすこと。さらにまた別の所では、馬が病気になるとこれをずっと食べさせたりすること、などである。ことほど左様にこの根は、カタイオのその地方では安く手に入るのである。ところが、別のもう一つの小さな根ははるかに高い値段で取り引きされる。それはラ

バルバロが生える同じスッキール山地に産し、マンブローニ・チーニ *mambroni cini* と呼ばれ<sup>20)</sup>、極めて高価である。普通、病氣とりわけ眼疾に用いられる。石の上でバラ水を加えてすりつぶし眼に塗れば、素晴らしく効くからである。その根は当地には持ち来たられてはいないようであり、またうまく説明するのも無理とのことだった。さらにまた、私がこうした話を何よりも歓ぶのを見て、次のようなことも語ってくれた。カタイオでは国中で別の草、というより葉が用いられており、その国人からチャイ・カタイ *chiai catai* [カタイ茶] と呼ばれている<sup>21)</sup>。カチャンフ [河中府] というカタイオの地方で採れ、あらゆる地域で普通に賞味される。彼らはその草を、乾燥したのである生のものである、水に入れてよく煮る。その煎じたものから一杯か二杯空腹時に飲むと、熱が下がったり、頭や腹、わき腹や関節の痛みが取れる。しかし耐え得る限り熱くして飲む。また彼によれば、その他無数の病氣に効き、その時彼は思い出せなかったが、とりわけ痛風にいいとのことだった。たとえばもし誰かが食べ過ぎで胃がもたれていると、この煎じ湯を少し飲めば僅かの間でこなれる。だからとても高価で大切にされており、旅に出る者は皆これを携え、このカタイ茶一オンスのためならラバルバロ一袋とでもいつでも飲んで交換するほどである。またカタイオの国人たちは、もし我々の地域やペルシアやフランキア [フランク] の国でこれが知られたら、もはや商人たちは必ずやラヴェンド・チーニ *ravend cini* (彼らはラバルバロをこのように呼ぶ) を買わなくなるだろう、と言っているとのことだった。<sup>22)</sup>

ここでひと休みして、ラバルバロの他に何か話してもらえるかどうか尋ねたところ、他にはなにもないとの答だったが、まだ日が長くその日の残りをそれまで過ごしたように他の楽しみなしに無駄に費やすことにならぬよう、カンピオンとスッキールからコンスタンティノーブルへの帰りはどのように旅したか、それを話してもらえないか尋ねた。すると何でも飲んで話すとのこと、我々の通訳マンブレ氏を通じて次のように語り始めた。帰りは隊商と共にたどった往路と同じ道は取ることはならなかった、というのもいざ発とうとしたときまたま、イエシルバスと呼ばれる緑の帽子のタルタル人諸侯が、彼らの共通の敵ソフフィに対して当たるべく同盟を結び、カスピ海の上の荒涼たるタルタリアの道を通って大トルコそしてコンスタンティノーブルへと多数の供を引き連れた一人の使節

を派遣する、ということが起こったからである<sup>23)</sup>。その機会に便乗して同行すれば、道中の便宜のみならず食糧の点でもとても好都合と思え、かくて彼らと共にカッフアまで来たったのだった。という次第で、彼にすれば行きと同じ道を戻ったならどんな旅になったかを話す他なかったわけである。したがって、そうすれば次のようになっただけのことである。すなわち、カンピオン市を発つとまずガウタ [カオタイ] に着く。毎日数ファルセンク farsenc 進むから（一ペルシア・ファルセンク [パラサング、5985m] は我々の三マイルに当たる）、そこまで六日間の道のりである。普通は一日八ファルセンク進むが、砂漠を横切ることによって日数は他の通常の道の半分になっても、砂漠と山岳のため半分もはかどらない。ガウタからスックイールまで五日、スックイールからカムール [ハミ] まで十五日で、そこからムスリムが始まり、そこまでは偶像教徒である。カムールからトゥルファンまで十三日、トゥルファンから三つの町を通る。最初がキアリス [カラシャール?] で十日間の行程、次がクキ [クチャ] でさらに十日、そしてアクスまで二十日。始めはそこまでは人の住むところだが、アクスからカスカル [カシュガル] まで極めて険しい砂漠 [タクラマカン] をさらに二十日。カスカルからサマルカンドへ二十五日、サマルカンドからボカーラヘコラッサム [フワーリズム] 地方を五日、ボカーラからエリ [ヘラート] へ二十日、次いでヴェレミ [ヴェラミン、テヘランの東] へ十五日、そしてカシビン [カズウィン] へ六日、カシビンからソルタニアへ四日、ソルタニアから大タウリス [ダブリーズ] 市へ六日である。以上がこのペルシア商人から聞き出したことで、その旅の話は私にはなんとも有り難かった。というのも嬉しいことに、マルコ・ポーロ殿の旅行記の第一巻に出てくる多くの市やいくつかの地方と同じ名が確認できたからである。ここに取り立てて記して置く必要があると思えたのもそれが故である。

もう一つここに、かのペルシア商人カジ・メメット氏が当市を発つ前に語ってくれた、カンピオン市とその住民に関する僅かながらいくつかの細部の簡単な要約をして置くのが適当と思える。彼に手短かに掻い摘んで話してもらったとおり、ここに私も同じように親愛なる読者のお役に立つよう書き記しておこう。

カンピオン市は偶像教徒が住んでおり、タルタル人の大帝ダイミール・カンの

支配下にある。同市は、くまなく耕され各種の産物に恵まれたとても肥沃な平野にある。人々は黒い綿布の衣を着、冬は貧しき者は狼や去勢牛の皮を、富める者は高価なリスやテンの皮を裏地に付け、棒砂糖のようなとんがった黒い帽子を被る。男たちは大柄といわんよりは小柄で、我々と同じように大抵、とりわけ一年のある時期には、髭を蓄える。彼らの家の建て方は我々の所と同じで、煉瓦と天然石造り、二階か三階建て、天井を張り種々様々な色と柄の絵を描く。絵師はいくらでもおり、絵師ばかりが住んでいる一角があるほどである。裕福で豪勢な君侯は、大きな台座を作らせ、その上に金糸銀糸で刺繍し真珠や宝石をいたるところにちりばめた絹の輿を二台据えて友人と共に乗り、四、五十人の奴隷に担がせて町中をねって楽しむ。貴人は、飾りもないむき出しの、四人か五人で担ぐ輿に乗るだけである。

寺院も我々の教会と同じような造りで、ずらっと柱が立ち並び、大きいになると四、五千人は収容できるそうである。また像が二体あり、一つは男もう一つは女で一体の長さ四十フィート、地面に横たわっており、全体が金箔で覆われ、どちらも一体作りである。また優れた石切り工がおり、歩いて二・三か月の所から天然石を切り出し、鉄の輪の付いた高い車輪が四十もあって五・六百頭の馬とロバで曳く車に載せて運ぶ。他に小さな像もあって、頭が六つか七つ手が十本あり、その手にたとえば一つは蛇もう一つは鳥もう一つは花といったように、それぞれ違ったものを持っている。

聖者のような暮らしを送る人たちが沢山いる僧院もいくつかあり、その部屋の戸は壁に塗り込まれてしまっていて、生涯二度と外に出ることは出来ない。だから食事は毎日そこに運ばれる。一方、町に出る僧も我々の所と同じようにいくらでもいる。

親戚縁者の誰かが死ぬと、何日も白衣つまり綿布を身にまとう風習がある。その衣は我々のと同じように地面に届くほど長く、袖はとてもゆったりとして、我々がヴェネツィアで着るア・ゴメドのようである。<sup>24)</sup>

かの国にも印刷機があり、それでもって書物を刷る。彼らの印刷術がここ我々のと同じかどうか知りたいと思って、ある日彼をサン・ジュリアーノのトンマー

ゾ・ジュンティ殿の印刷工房に案内してお見せしたところ、印刷に用いる鉛の活字や捻り機を目にし、どれもとてもよく似ているようだとのことだった。

かの市は、中に土を盛ってその上を四台の馬車が並んで通れるほどの厚さの城壁を巡らせている。その城壁の上には大きな塔があり、大砲がずらっと並んでいて大トルコのそれと変わるところはない。壕は広く水のないのが普通だが、必要とあらばいつでも水を張ることが出来る。

ある種のとても大きな牛〔ヤク〕がおり、その毛は長くてごく細く真っ白である。

カタイオ人と偶像教徒は、生国を離れて世界を行商して廻ることは禁じられている〔明の鎖国〕。

コラッサムの上の砂漠を越えてサマルカンド及び偶像教徒の町まではイエシルバス、つまり緑の帽子が支配している。この緑の帽子というのは、とがった緑色のフェルト帽を被ったムスリムのタルタル人〔ウズベク人〕のことで、その不倶戴天の敵でありペルシャの支配者であるソッフィ方の者と区別してこう呼ぶ。後者もまたムスリムであるが、赤い帽子を被っている。彼ら緑帽と赤帽は、宗教観の違いと国境をめぐる争いのため相互に果てることなき残虐な戦いを行ってきた。帝権を有しそれを支配している緑帽側の都市としては、なかんずく目下のところ一つはボハーラもう一つはサマルカンドで、それぞれの君主を擁している。<sup>25)</sup>

彼らには三つの独特の術があり、一つはキミア **chimia** といって我々がアルキミアと呼ぶもの、もう一つはリミア **limia** で人を恋さす術、さらにもう一つはシミア **simia** で、存在しないものを見さす術である<sup>26)</sup>。かの地では貨幣は鑄造されず、貴人や商人はそれぞれ金か純銀を細い延べ棒にさせ、それをサッジョに刻んで使う。カンピオンやスッキールの住民は皆このようにする。カンピオンの広場には毎日シミアの術を使う術師が沢山集まり、大勢の群衆に取り巻かれて、その術を使ってたとえば連れの男の体に端から端まで刀を突き通したり、腕を切らせたり、その血を皆にみせるといった類の驚くべきことを披露する。

第一巻第四二章と五三章でマルコ・ポーロ殿は<sup>27)</sup>、北方の下にウン・カンなる大君がおり、人によればその名は我々の言葉でプレーティ・イェンニ〔プレスター・ジョン〕を意味し、その本拠地はオグ〔ゴグ〕とマゴグなる二つの地方で

あったと言っているが、実際今に伝わる二・三百年前に作られた航海図を見ても全て、プレーテ・イアンニは北方の下やガンジス川とインダス川の間の上のインドの上に置かれており、エチオピアにいることなどは全く書かれていないことを知るべきである。またかのアビルファダ・イスマエルも、チーナ国境について記したところで、西はインド、南はインド海、東はオリエント海、北はゴジとマゴジつまりタルタル人の地方であると言う。彼はまた、オーケアノス [大洋] が取り巻いて接する居住可能な地についても次のように書く。「オーケアノスは東からチーナの地に向かい、次いで北に折れ、その地を過ぎるとついにゴジとマゴジすなわち最果てのタルタル人の国境に至り、そこからさらに未知の地へと向かう。そして常に西の方向に流れながらロシアの北境の上を通り、次いで北西へと向かう」。このように、マルコ殿の言うところにおいても航海図に見るところにおいても、プレーテ・イアンニは北方の下ゴジとマゴジの地方に置かれており、北方のそれについて記すのみで、エチオピアのそれについては何も語っていない。またエチオピアにはキリスト教君主を置きはするが、その名を挙げているわけではなく、それどころか第三卷第三十八章で<sup>28)</sup>、その君主がエルサレムに派遣した司教に対し侮辱して割礼を施すというこの上ない無礼が、アデンのスルタンから加えられたことを記している。アビシニア人はいつでも皆割礼を施されていたのだからして、これは明らかに、エチオピアのプレーテ・イアンニについては彼は何も聞かなかったことを示すものである。

同書について、さらに一般的に言って置くべきことがいくつか残っている。というのは、優れたコスモグラファーでありかつ我が親友であり、ヴェネツィアの隣ムラーノにあるカマルドリ教団サン・ミケーレ修道院院長でもあった博識のフィレンツェ人ドン・パオロ・オルランディーニ師から<sup>29)</sup>、同氏もそれを同修道院の老僧たちからお聞きになったとのことだが、私が若かりし頃何度となく伺ったことであるが、何かといえはすなわち、今も大きなケースに納められて教会内の合唱隊席の側にみられるあの羊皮紙に細密に描かれた美しい古地図、それが最初どのようにして、コスモグラフィーの知識を好む同院の一俗修道士によって、かつて偉大なるマルコ・ポーロ殿とその父君によってカタイオから持ち帰られていた一葉のとても美しく古い海図と一枚の世界地図から入念この上なく描き写さ

れたのか、というその次第である<sup>30)</sup>。彼〔マルコ〕はグラン・カーネの支配下にある地方を通るにつれ、上述のようにその地図上に、自分が出会った町や土地を書き加え記していった。ところが、彼の後にそれに色を付けて仕上げた別の者が、知らずに種々様々な人間や動物その他下らぬ事どもを書き足し、後世のなんとも滑稽な事を沢山付け加えたものだから、良識ある人々の間では永年ほぼその権威をすっかり失っていた。しかし数年ならず前、それまで絶えてなかった事だが、思慮分別ある人々によってマルコ・ポーロ殿のこの本書をもっと丹念に読んで考察し、彼〔マルコ〕が書いた事と彼〔俗修道士〕の図を突き合わせる作業が始められ、すると直ちに、上述世界地図は疑いもなくルコ・ポーロ殿の地図から取られたものであること、またそれに則って非常に正確な寸法と優れた順序でもって作製されたものであることが識られるに至った。爾来かくて今日に至るまでずっと全市で、とりわけコスモグラフィーの事どもを歓ぶ者達のもとでとても尊重され、一日とて誰かが大いなる歓びをもってそれを見たり考察したりしない日はないほどで、聖なる当市の数ある奇跡の中でも、外国人たちがムラーノにガラス工芸品を見に行つたとて、これ以上に美しくまた珍しい物は陳列されていない程である。たとえそこでは多くのことが、度にせよ数にせよ幾分混乱し秩序だっていないにせよ（これはそれに色を付けて仕上げた者の責に帰せしめるべきであるが）、昔の人にはまだ知られていなかったとても素晴らしく価値ある詳細がこれによって理解できるのである。例えば南極の方には、プトレマイオスほかすべてのコスモグラファーが海ではなく未知の陸を置いたものだが、もう何年も前に作られたこのムラーノのサン・ミケーレの図では海がアフリカを取り巻いており、西に向かって航海可能なことが分かる。このことはマルコ殿の時代にはもう、後に我々が時代の一千五百年にポルトガル人によって希望峰と呼ばれるまで、その岬には名前がまだ付けられていなかったにしても、すでに知られていたことなのである。<sup>31)</sup>

またその付近には、マルコ殿が第三卷三五・三六章で語っているところの、今日サン・ロレンツォ島と呼ばれるマガスタル島、ジンジバル島がみられるし、他にも後にポルトガル人によって当代に発見された東方の島々の名前の中に沢山詳しいことがみられる。次に我々の北方の下の部分には、当代や今に至るまでの過

去の時代の著者やコスモグラファーはこぞって氷結した海を置いたし今も置き、極に至る九十度にまでずっと陸が続いているとしてきたものだが、この世界地図ではそうではなく、陸はノルウェーとスエーデンのわずか上までだけであり、そこから東北東の方向にモスクワ国とロシアに向かい、そしてまっすぐカタイオに至っていることが分かる。それが本当であることは、過ぐる年イギリス王エドワード六世の御世に、カタイオを発見すべくイギリス人がその船でもって行った航海によって正しく証明されよう。というのも、彼らは途次たまたまモスクワ沿岸に至り、そこは当時ロシア皇帝にしてモスクワ大公イワン・ヴァスケルィッチ〔雷帝〕が治めており、彼は非常な喜びと驚きをもって彼らを迎えて温かくもてなし、かくて彼らはその海が氷結していず航行可能であることを発見したのだった<sup>32)</sup>。その航海は（その結末はまだ定かでないが）、何度もそこに通りその海に慣れ親しんでよく知ることが出来れば、世界のこの我々の部分の事どもについて極めて大きな変化と革新をもたらすことであろう。とまれ、これらの詳細がすべてカタイオの海図や世界図から取られたことは疑いない<sup>33)</sup>。何故とならば、マルコ殿はアラビア湾にもその近くの島々にも行ったことはなく、第三巻の情報の大部分はインド海の船乗りたちから得たと考えられるからである。彼らは大まかに、一つの島からもう一つの島までどれくらいか自分勝手に彼に話したのである（千マイルや二千マイルは彼らにはそう大したこととは思えなかった）。またどんな風に乗ってそこに行くかも、今日かくも正確な図や風や度数をもって詳細に作製された海図によってはっきりと知られているようには、その頃はまだ分かっていなかった。また、同じ一つの地方が二つの名で呼ばれたりしていても、読者はびっくりなさらぬよう。また時として島の代わりに国と言っている。例えば第三巻第十章に、小ジャワには八つの国があると言っているが、そこに通じた人によればそれらは島であり、サマトラ国（彼はサマラと呼んでいるが）というのは大サマトラ島であるということになる。その他このように今のところまだ知られていない多くのことがあるが、将来は時とともにポルトガル人の航海によってたやすく分かるようになるであろう。

あの頃はまだ我々の時代に発明されたような羅針儀や方位磁針、それは全くもって驚くべき希有なものだが、そうしたものはなく、今日するように極の高度を



度数で知るということは出来ず、北極星が海面から何キュービットか何ブラッチアの高さにあるといったふうに、それを大体観察して言っていただけだったということをご存じありたい。<sup>34)</sup>

第三巻の冒頭にある船の建造方法は、モルツケやキーナの島で行われている方法に似ている。

最後に第三巻の末尾でロシアと暗闇の国について語っているが、昔の様々な地図では北方の下の我々の居住可能な地の果てに置かれているのに対して、その国の位置については、彼が書いたのは冬の月であったにもかかわらず、少しの誤りもない。

とまれ、マルコ・ポーロ殿の書のいくつかの地の説明として、とりあえず以上で十分であろう。

#### 【註 (I-6)】

1. 'Dichiarazione d'alcuni luoghi ne'libri di messer Marco Polo, con l'istoria del reubarbaro', *Navigazioni e Viaggi*, vol. 3 pp. 56-71.

2. ラムージョ版(R)では、旅の経緯を述べたいいわゆる「序章」の部分はいくぶん縮小されて第1巻第1章(Milanesi pp.79-89)となり、「小アルメニア」は第2章(pp.89-90)にきて、いる。ラムージョが基本としたピピーノのラテン語版(P)では、第1巻第1-10章が「序章」、「小アルメニア」は第11章に始まる: cf. *Itinerarium*, ed. Shinobu Iwamura, The National Diet Library Tokyo 1949 (1485年アントワープ版のファクシミリ)。Benedetto 1928, Moule 1939, 愛宕 1970 では第20章 (Cf.章対応表 Moule pp.504-7)。

3. 当時小アルメニアはキリキア、シリア北部、ユーフラテス川西の古代小アルメニア、イサウリカ、カッパドキアを含んでいた。1080年建国になり、当時の君主は、東行で知られるヘトゥム一世(1224-69)を継いだルペニデ朝レオ三世(1269-89)、ペルシアのタルタル人に臣従していた。一方大アルメニアはやはりタルタル人の下でトルコ諸侯の支配下にあった (Yule p.42, Milanesi p.56)。

4. 「序文 (一)」に登場するシリアの学者アビルファダ・イスマエル Abu 'l-Fida Isma'il (1273-1331) (cf. 「序文 (一)」注14 p.79)。

5. ロメイ Romei は、セルジューク・トルコのスルタン侯国ルム Rum (1037-1157)。当時アナトリア・カラマン人のトルコマニアの中心であり、従って小アルメニアのキリスト教国ではなかった(Milanesi p.56)。

6. 上述諸注からも分かるとおり、当時小アジアには小アルメニアのキリスト教国、アナトリア北部のギリシア帝国、その間のトルコ人スルタン侯国が混在しており、すべてキリスト教徒であったわけではない。

7. タルスス Tarsus は実際は、東経34.53北緯36.55（以下、度数は近代のものと全て異なるが、特に記さない）。

8. Cf.「序文（二）」；ジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥアン（伊東敏樹訳注）『コンスタンティノーブル征服記』筑摩書房 1988。

9. この執筆当時ヴェネツィアの直面していた最大の問題は対トルコ戦であり（レパントの海戦は1571年）、トルコに関するこうした記述からも、ラムージョが古典文献の考証を専らとするユマニストだったことがうかがえよう。

10. ジョルジャ Georgia（現ジョージア）の地名は、ペルシア語<グルジスタン Gurgistan>（クラ Kura 川の地）に由来する(Milanesi p.58)。竜退治で名高い聖ジョルジオ（ジョージ）は伝説によれば、小アジア・カッパドキア出身で、303年ペルシャ皇帝ダキアヌスによって殉教したことや、異教徒と戦う守護聖者というその性格からこうした説が生まれたものであろう。Cf.ヤコブス・デ・ウォラギネ（前田・山口訳）『黄金伝説』2、人文書院 1992, pp.75-88。

11. マルコはカスピ海が湖であることを正しく記している。

12. クンツァル Cunzar は<カザール Khazar>（カスピ海北の遊牧民）、ジョルジャン Georgian は<ジュルジャン Djurdjian>（ペルシア語グルガンより）、テルベスタン Terbestan は<タバリスタン Tabaristan>（ペルシア語マザンダラン、同海南東の地）より。

13. スンニー派オスマン・トルコのスレイマン大帝（在位 1520-66）は、シーア派サファヴィー朝ペルシャ皇帝シャー・ターマスプ（在位 1524-76）と敵対し、その弟イスカス・ミルツァの反乱を支援すべくアルメニアに赴いていた（注25参照）。

14. Benedetto, Moule cap.39, 愛宕 第40章。

15. Benedetto, Moule cap.61, 愛宕 第65章。ラバルバロ reubarbaro（学名Rheum offi

cinale B) : 大黄の一種、高さ2-3mに達する。その根は中世中国では胃腸薬として珍重された(愛宕 I p.133)。ヨーロッパでは食後用リキュールとしても用いられる。

16. タバス Tabas は、ユールによればキラン地方ではなく、イエズド北方塩の砂漠のタバス・キリ(ギリ)(p.290)。

17. ミケーレ・サン・ミケーレ Michele San Michele (1484-1559): ルネサンス期ヴェネツィアの指導的建築家の一人、代表作にパラッツォ・グリマーニ。 トンマーズ・ジュンティ Tommazo Giunti : ラムージョの書の印刷出版者 (cf. 「序文(一)」)。 ミケーレ・マンブレ Michele Mambre: キプロス人、当時の有名な地図制作者ガスタルディの協力者。

18. ダイミール・カン Daimir Can : ユールによれば Daiming Khan で、大明朝 Ta-Ming の汗一般(p.291)。当時は第12代世宗嘉靖帝(在位1521-66)。ミラネージによれば(p.61)明代モンゴル中興の祖とされるダヤン・カーン Dayan Can (在位1482-1519)。このペルシア商人カッジ・メメットの東行がいつ頃のものか詳らかでないが、16世紀半ばラムージョの執筆頃の汗はその孫アルタン・カーン(1507-81)。当時再び勢力を強めたモンゴル族は明と敵対し、盛んにその北辺に侵入していた(1542年はとりわけ大規模なものとして知られる)。甘州・肅州は明の領土だったが、西端嘉峪関に至る長城の造営はこの時期のもの。

19. この文からする限り、ラムージョが絹の製法に正確に通じていたか疑わしい。

20. 詳細不明だが、ユールによれば Mamiran-i-Chini で、Jinseng (薬用人参)(p.292)。

21. 以下、ユールに指摘された、ヨーロッパに茶を紹介した最初のものとして著名な箇所。 Cf. Yule-Cordier, *Cathay and the Way Thither*, vol.1 p.131 n.2, Supplementary Note XVIII pp.290-6 (カッジ・メメットの話の部分の英訳。これをユールは、カセイと中国が同一であることを確認したベネデット・ゴメスの旅(1603年)をもって結ぶ前に、それ以前の最後のものとして紹介している: Ibid. p.181)。

22. 明は海禁・朝貢を貿易政策の原則とし、特に茶は西蕃諸国との馬との交易の主力商品であり(茶馬貿易)、その専売を定めた推茶法によってとりわけこの陝西・四川の地域では厳しく統制されていた。しかし、商茶や私茶による密貿易も盛んだった。西洋には翌17世紀初めオランダやイギリス東インド会社の手で輸入され始め、18世紀には絹に代わって中国の主要輸出商品となり、ついには19世紀にアヘン戦争を引き起こすに至る。ま

た、ほぼ全国的に生産されており、カチャンフ（Cacianfu 山西省河中府）だけということとはありえない。

ついでながら、マルコのその章（Ch.110「カラモラン河」）は、ラムージョ版では、「この地にはとりわけ絹、生薑、ガランガ [カヤツリグサ]、スピクム [ラベンダー] その他あらゆる種類の香料が大量に産するが、我々の地 [ヨーロッパ] にはもたらされない」(Libro II cap.33 p.198)とあり、この文はRとZにしか見られない(Benedetto p.106)。マルコには茶への言及のないことがよく知られるが、こうした香料か薬草の一種とみなされていることも考えられよう。

23. 注 25 参照。

24. ア・ゴメド a gomedo (< gomito 肘) : ルネサンス期ヴェネツィア絵画によく見られる、袖の長くゆったりとした着物、男女ともに用いる。

25. イェシルバス Iescilbas (トルコ語 Yeshilbash) : 当時西トルキスタンには、ムハンマド・シャイバーニ (在位1468-1510) によって建てられたモンゴル・トルコ系ウズベク人のシャイバン朝 (1428-1598) があり、サマルカンドやブハラを支配していた。彼らはスンニー派で緑色の帽子を被っていたためこのように呼ばれ、オスマン・トルコ人と区別してタルタル人とされている。一方ペルシャには、アブ・ムザッファル・イスマイル Abu Muzafar Isma'il (1502-24) によって創始されたシーア派のサファヴィー朝 (1502-1736) があり、アム川を境として彼らと敵対しており、やはりスンニー派トルコ人のスレイマン大帝とも敵対関係にあった (注13参照)。彼らペルシャ人は赤色の帽子を被り、同皇帝はエス・スーフィ es-Sufi [ソッフイ Soffi] と通称されたことからこのように呼ばれる。Cf.江上波夫編『中央アジア史』山川出版社 1987, pp.504-9。

26. いずれもアラビア語、キシアは<錬金術>、リミアはイルム<科学>、シミアは<催眠術>(Milanesi p.67)。

27. Benedetto, Moule capp.64 & 74, 愛宕 第69,79章。以下の文からすると、ラムージョが力説しているのは、プレスター・ジョンの国がエチオピアではないということであり、当時 (16世紀後半) 一般になおその国の存在が信じられ、それが最北のタルタル人ゴグ・マゴグの国に擬されていたことがうかがえる。中世末には一担アジアからエチオピアに移されたプレスター・ジョンが、アフリカ探検による新しい知識の蓄積によって、再

びアジアの今度はインドではなく北東に戻される現象がみられる。しかし、後述されるフラ・マウロ世界図ではアフリカ・ナイル川上流に置かれる (cf.注40)。Cf. C.F.Beckingham, 'The quest for Prester John', *Between Islam and Christendom*, London Variorum R eprint 1983, pp.291-310.

28. Benedetto cap.194, Moule cap.193, 愛宕 第210章。

29. カマルドリ Camaldoli 教団：1012年聖ロムアルドゥスがアレッツォ地方カセンテイーノのカマルドリ修道院を中心に始めた教団、ベネディクト会の一派。フィレンツェ、ナポリ地方に広まったが、今は絶えている。

30. 著名なカマルドリ俗修道僧フラ・マウロ Fra Mauro (?-1459)の地図、1459年完成、「ジパング」の名が最初に登場する地図としても知られ、今もヴェネツィア・サン・マルコ図書館に保存される。ポーロが東方から持ち帰ったと伝えられる海図や地図がヴェネツィアにあったことは知られるが、今は残らない。Cf. R. Gallo, 'La mappa dell'Asia della Sala dello Scudo in Palazzo Ducale e il Milione di Marco Polo', *VII Centenario della Nascita di Marco Polo*, Venezia 1955, pp. 195-231; 織田武雄『地図の歴史』講談社 1973; R. A. スケルトン (増田・信岡訳) 『探検地図の歴史』原書房 1992。

31. アフリカの南端を廻ったバルトロメオ・ディアスの航海は1487-89年、帰国後ポルトガル王ホアンによって「希望岬」と名付けられた。1500年の航海は、インドに到達したヴァスコ・ダ・ガマのもの。ただしフラ・マウロは、アジアはマルコ・ポーロによったのに対してアフリカはもっぱらサラセン人の知識によっており、アフリカが海に取り囲まれているとマルコあるいは当時の人々に知られていたかどうかは確定できない。

32. 1553年チューダー朝エドワード六世治下セバスチャン・カボットにより派遣された英国北洋探検隊は、当時のロシア・ツァール・イワン四世 (雷帝 1530-84) によって迎えられた。ラムージオは「香辛料交易に関する論考」(vol. 2 pp. 957-90)でもこれに言及している(Milanesi p. 70)。

33. Cf. R. Gallo, art. cit..

34. 13世紀当時すでにインド洋航海者の間では羅針儀や海図が用いられていた。



図4・5 フラ・マウロ図カタイオ





図6 フラ・マウロ図オリエント

① Giava Ixola giava mazor molto preciosa e fertilissima ne la qual sono prusor regi.

<ジャワ とても価値高く肥沃な大ジャワ島、そこには複数の王がいる>。

② Ixola de cimpagu<チムパグ島> ③ Magnifico porto de Zaiton<大ザイトン港>

④ Regno de çaiton In questo porto de zaiton el gran chan tien naue assai a bixogno del suo stato et

ancho li capita assai naue de le indie e de diuerse parte et ixole con diuerse marchadantie zoe spetie

zoie et es per le qual esso se ricel[v]e notabel datij<ザイトン王国 このザイトン港にグラン・カン

は自国に必要な多くの船を有している、またそこにはインディエや様々な地や島からたくさんの船が様々な

商品、つまり香料・宝石などをもってやって来る、それにより彼は莫大な関税を手に入れる>。